

第51週(12月16日~12月22日)トピックス: <インフルエンザ>

京都市の第51週のインフルエンザの定点当たり報告数は、34.56(前週15.54)、全国は42.66(前週19.06)と、ともに増加し、警報レベルの開始基準値である「30」を超過しました(図1)。

本市のインフルエンザの発生状況について、前シーズン(2023/2024シーズン)は、シーズン開始の2023年36週時点ですでに流行入りの目安である「1.0」を超過しており、その後報告数の増加は比較的緩やかで、年末年始に減少後、再度増加し第5週に警報レベルとなる2峰性となりました。一方、今シーズン(2024/2025シーズン)は第46週に流行入り後、報告数が急増し、前週(第50週)に注意報レベルを超過、今週はさらに倍以上の報告数となっており、流行が急速に拡大しています(図1)。

都道府県別でも前週警報レベルを超過したのは福岡県、大分県の2県でしたが、今週は近畿6府県すべてを含む、36都道府県で警報レベルを超過しており、全国的な流行拡大となっています(図2)。

今シーズンのこれまでの全国のウイルス型別検出割合を過去2シーズンと比較すると、今シーズンはA(H1)pdm09型が約90%と非常に高い一方、過去2シーズンではA(H1)pdm09型の割合は2023/2024シーズンが約27%、2022/2023シーズンでは5.5%と低く、今シーズンの患者急増の原因に、A(H1)pdm09型に対する免疫を持たない方が多い可能性が考えられます(図3)。

人流が増加する年末年始を控え、更なる流行拡大が懸念されることから、今後の発生動向に注意が必要です。

インフルエンザは感染症法上5類の定点把握感染症に分類されており、インフルエンザウイルスを病原体とする感染症です。ウイルスに複数の型があるため、同じシーズン中に複数回感染することもあります。

インフルエンザの症状は、38℃以上の発熱、頭痛、関節痛、筋肉痛など全身の症状が突然現れます。併せて、のどの痛み、鼻汁、せきなどの症状も見られ、小児ではまれに急性脳症を、高齢者や免疫力の低下している人では肺炎を併発するなど、重症化することがあります。

このため、65歳以上の高齢者では、重症化予防のため、インフルエンザワクチンの接種が推奨されています。ワクチンを接種すれば、インフルエンザに絶対に罹患しないというものではありませんが、発病後の重症化や死亡を予防することに関して、一定の効果があることが認められています。本市においては、65歳以上の市民を対象にインフルエンザ予防接種が令和6年10月15日~令和7年1月31日に実施されています(下記ホームページ参照)。重症化予防のため、積極的にインフルエンザワクチンを接種をしましょう。また、感染防止のために手洗いや咳エチケットの励行、免疫力向上のためにバランスの取れた食事や十分な睡眠などを心掛けましょう。

- 令和6年度高齢者インフルエンザ定期予防接種のお知らせ(京都市情報館)
<https://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000331799.html>
- 令和6年度インフルエンザ対策について(京都市情報館 医療衛生企画課)
<https://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000334696.html>

